

六の響き、遠く沈み行く谷間のあたりから、鷺の御山の夕暮は次第に襲ひ來た。暖く親に抱かれんと豫期して歸る小鳥はねぐらに急いだ。乙女の腫の様な星は烈しく光を放つた。身解見得信證時解脱不時解脱、日の暮れるのを始めて知つた自分は盛に西谷名目の暗誦を試みて居るのであつた。月の光壁に反射されて紅葉の二片三片、本の上に飛散した。本を閉ぢて冥目した。沈黙した宵は本草も動かぬ。

月は變れど今宵は父の旅立の日——恚う思ふと父を慕ふ血液は燃ゆる様に激烈に全身を流れる。自分は靜に默唱し三界無安の文をたどつた。噫我が父!!と、つかまへ様とした時、柔き風はそつと我が肌を撫で去つて、金線をかなざる様に風鈴に音を立て、蟲は草葉の下から悲れお聲を擧げた。嗚呼自分の眞の父に遭はしめたのは誰だろう?自分分は宗祖の御眞骨を懷きながらつぶやく様に巖然側に聳えて居つた白き堂に向つて首を垂れ掌を合せた。あゝ忘れ難き鷺峯の夜景!それは自分をし

て宿望を遂げしめると共に、悉是吾子の確き信仰を把持せしめたのであつた。

頼むべきは

松 木 秀 月

人の心の變り易き事は、吾人が常に耳にし、且つ口にする所に非ずや。而して、我等が眼前の總ての現象は、皆是れ、合離變遷常無きものあり。此の變り易き人の心と、限り有る而して常無き現象等、以て限り無き生命を持てる吾人の頼みとするに足るか。否。尠ども吾人の頼みとするものとは、如是昨日合ふては今日離れ、又今日合ふては明日離るてふ、常無きものにては非るべし。必ずや一定不變常往なるものに非るべからず。斯く思ひ來れば、世の所謂、名譽、財産、地位乃至親友に至る迄、皆是れ吾人の絶對的頼みとするに足らず。何とされば、今日の名譽は明日は不名譽なるかも知れざるべし。乃至今日の親友は、如何

なる事に依りて、明日敵とならずとも計られず。
噫！思ふて此處に至れば、世の中の總ては皆是れ
吾人の頼むべきには非ず。頼むべきは但是れ我こ
ゝろのみ。

心や、或は意とかり、識となり、一切萬業の根
本とある。故に又心を集起とも云ふ。一切善惡の
所作は悉く心に集め、心より起す。正法念經曰く
『一切善不善法心爲根本』と。高き天も廣き地も、
又佛界も、地獄界も、皆是れ心の現れにして、我
等の心は小さき五尺の躰と、短き五十年の壽命と、
狭き眼前の小天地とに限られたるものにあらず。
心の發するや能く天地に參すべし。然して心の誠
なるや、國を擧つて攻むるも之を屈する事能はざ
るべし。宗祖の御一代は能く是を示したるものに
非ずや。北條執權と、及び天下を擧げて、或時に
は松葉ヶ谷に焼かんし、伊豆伊東に流し、又小松
原に斬らんとし、龍口刑場の露と化せしめんと企
てて、最後鳥も通はぬ北海佐渡ヶ島根に流したる
おど、所有手段を以て、之を屈せしめんとせしも、

遂に其の理想を曲ぐる能はざりしに非ずや。

如是心や廣大無邊、絶對的大勢力有るものなる
も、往々邪道に墮り易きものなり。金剛石と雖も
磨かずば遂に其の光は出づべからず。古語に曰く
『磨いたら磨いた丈に光るなり、心の靈魂も何の
玉でも』と。若し我が心にして磨かずば、永く煩
惱の汚染に包まれて、邪道に墮し、尊き我が心の
玉は其の光を現はさざるべし。諺に曰く、『心こ
そ心を護る心あれ、心にこゝろ心ゆるすな。』と。
心して我が心の邪道に墮ち入るの暇無き迄に磨き
てこそ、眞に吾人の頼みとするに足る心は成ずべ
けれ。其の方法とは即ち『事にふれ、わりに付け
ても後生を心にかけて南無妙法蓮華經と唱へ、花
の春雪の朝も是を思ひ、風戦ぎ村雪まよふ夕にも
忘るゝ隙無かれ。是等を想ひ忘れて、我慢、偏執、
名門、利養に着して妙法を唱へ奉らざらん事は、
志の程無下にあえなし。さこそは皆成佛道の御法
とは云ひながら、此人争か佛道に懶かざるべき。』
(遺文八ノ十五取意)と。此の聖訓こそ實にたのもし

き御教へにあらざるか、我が唱ふる題目は是れ宇宙の眞理たる妙法五字に非ずや。我が心は森羅三千の諸法の根本に非ずや。此題目と我が心と合致したる時、吾人は忽ちにして釋尊の因行果徳の二法を獲得して、我身即是の妙法を現じ、我が心の汚染は晴れて明かなる事實鏡の如く、日月の如く智慧の光明三千界を照す時、即ち我が心の眞の尊さを知るならん。其の時の心や、吾人の絶對に頼みとするに足るものぢん耳。

如何にせば意義ある 生活をなし得る歟

望 月 本 啓

此の問題は常に余が腦裏を往復した事である。恐らくは余のみではなからう。世の中の總ての人が此問題を或は解決し或は未解決の儘持つて居る事であらうと思ふ。今少しく余の信する處に隨て之を言ふて見やうならば、吾々の此の日常生活の

有様を考へて見るに、吾々は人天の大導師として、否教導職の一員として僧侶として一ヶ寺の住職として、誰から何時何處で見られても耻しくない丈の人格があるであらうか。即ち一坊の主人として其れ丈の價値のある様を生活の仕ぶりであらうか。なるほど人様の前では、随分四角張つて其程に見悪い事もせないが、扱て自分の室へ歸つて後は如何である。遠慮なく膝を崩す、何時でもかまはず横にゐる。腹も立てる悪口も言ふ、時に依ては人の頭も撲り兼ねない、旨いものを喰はすれば喜ぶ、少し味が變て居れば小事を言ふ、苦勞を仕事をさせられるとブツブツ言ふ、勿体ない事であるけれ共、御妙判を拜讀するより小説を讀む方に力を入れる、机の前へ坐て教科書を讀む時間より火鉢の傍らに空談雜語に過す時間の方が長いと言ふ有様。此れが一坊の主人として、坊内の者に尊敬を受ける丈の價値があると言はれやうか。自分等は他人に向つて信仰を説く身ではないか。乍然吾々の説く其の『信せよ!』は、先に立つべき